

一般部門 選評一覧（二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋）

目次（タイトル五十音順）	頁
悪魔の囁きとNの喜劇	1
アマビエ観察日記	1
一子相伝の蒼穹	1
有為の創痕	1
馬の泪	1
同じ山ぎはを見ていた	2
河原町通の儀式	2
五条高瀬川・少年探偵絵巻	2
幸せの育て方	2
小説 花いらんかえ	2
酔芙蓉の寺	2
月の河——秦河勝異聞——	3
デミタスカップの小さなロマンス	3
天下所司代 幻の京大仏	3
庭	3
橋の向こう側	3
フィット	3
文豪誕生！	4
都の錦	4
宮居樞漣非笥婢雲尊	4
無名の都	4
めいふるしろっふ・ばたーとーすと	4
妖術師	4
夜に鳴くセミ	5
羅生門の猫	5
ラブ・ミー・ドゥー	5

<一般部門>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
悪魔の囁きとNの喜劇	<p>○Nの喜劇というのはタイトルにふさわしい、これしかありえない言葉のように思った。また喜劇が、読者の一般的にイメージする内容とは異なり、それだけでもミステリー要素があって面白いと思った。</p> <p>○鞍馬や貴船、鴨川デルタ、喫茶店や大学の部室の雰囲気など、京都の様々な場所がいきいきと魅力的に描かれるとともに、京都らしさが散りばめられており、京都を舞台とした物語として楽しく読むことができた。</p> <p>○構成がよく練られていた。それぞれの章がばらばらの事件を取り扱っていると思いきや、一章から最終章までがしっかりと一本筋でつながっており、大きな物語としての読み応えがあった。</p> <p>○オリジナリティ溢れる設定も、「N先輩」をはじめとする登場人物たちも、面白く、魅力的だった。</p>	<p>○シリーズものの第1弾ということであれば、非常に面白いと思う。この作品だけで完結ということであれば、積然としない部分が残るのでもったいないと感じた。</p> <p>○未来を描いていることやAI技術を読者に意識させないための演出なのか、現在と同じ店舗が同じ状況で出てくるのは御都合主義に感じる。</p> <p>○アニメ風のノリとツッコミが「最終稿」にきてより過剰になり、小説というよりアニメのシナリオを読んでいるような感じがした。</p> <p>○「N先輩」が殺害された事件の真相を書かないまま終わってしまったのが、とてももったいないと思った。作品の核となる部分であるだけに、書かなかったのは書かないという楽な道に逃げたのかとも感じてしまった。</p>
アマビエ観察日記	<p>○学生のレポート兼体験記を小説に仕上げるという手法に舌を巻いた。コロナ禍特有の閉塞感が大きさでない形で見事に表現されており、それが都市伝説や昔話とのつながりを有することにより、単なる体験記には織り込み得ない、厚みのある世界観が加えられていた。</p> <p>○この作品は都市伝説や妖怪など、「空想的」と称されるものを取り上げているにも関わらず、現実に関与せしめる力強さがある。</p> <p>○コロナ禍における人間の生活をリアルなタッチで描くことに成功している。</p> <p>○自然や風景、人や雌魚などの描写が細密で、映像がありありと目に浮かぶ。特に、金魚が諸々の形を経て女の形へと変態していくさまは、目の前で演じられているかのように、生身の存在感がある。</p>	<p>○「アマビエ観察日記」という表題を付けるにはもったいない作品であると思った。表題からは、もっと安っぽくてファンシーな色の作品であることが予想されたが、その予想が良い意味で裏切られた。</p> <p>○資料の引用の部分は長く、読みづらい文体のため読み飛ばしたくなった。また、その部分を読んだからと言って作品への印象や知識はさほど変わらないと感じた。</p> <p>○主人公は賢くない設定であるがレポートの内容から頭の回転が悪くないことや冷静で世相にも関心があることなどが見て取れ、設定に矛盾を感じた。</p> <p>○「まえがき」「あとがき」の文章が硬い。特に出だしは、書店でこの本を買うか迷い、手に取って冒頭をパラパラ流し読みするとき、興味を引くような文章でなければ、読者は買おうとは思わない。</p>
一子相伝の蒼穹	<p>○職人の独特な空気感が新鮮だった。茶碗を制作する描写も子細に書かれており、リサーチ量に感服した。</p> <p>○どこか味わいのある文章で、寂石家の兄弟の茶碗づくりをめぐる葛藤や、複雑な生い立ちにまつわるそれぞれの懊悩が、内面描写や記憶の想起を通して丁寧に紡がれていく。頻りに視点が変わる文章であるにも関わらず、それぞれの人物が確かにそこに存在し、思考しているように思わせる筆力がある。</p> <p>○お茶の世界や京都特有の人間関係を濃密に描いている点は、まさに京都文学賞の作品ならではの感じがある。</p> <p>○茶碗づくりの場面は良く描けている。登場人物の苦心が具体的な創作の試行錯誤として文章表現の形に落とし込まれていることで、物語に説得力が出ている。</p>	<p>○タイトルがあまり良くない。一子相伝ということで結末が分かってしまう。蒼穹は本編で印象的に言及されていなかったため、読後のイメージと合わない。</p> <p>○あらすじがなければ主人公が誰なのか分からない導入で、それぞれの心情も掘り下げられておらず、全体的に記録のような淡々とした印象を受けた。</p> <p>○兄弟間でのキャラクターの描き分けができていない。二人の性格がどのように異なっており、逆にどのような点で似ているのか。兄弟の関係性は本作の根幹の一つだけにもっと細やかに描写するべきだった。</p> <p>○3人の語りが混同して、視点が定まっていない。章分けなどして、分かりやすく語り手を定めてほしい。</p>
有為の創痕	<p>○あっと驚く展開が定期的に盛り込まれ、文量がしっかりあったにも関わらず最後まで一度もだれることなく読み進められた。</p> <p>○これだけ分量のある作品を飽きさせずに、ストレスなく読ませたのはすごいと思った。それだけ、タイムスリップして忍びとなり、織田信長を助けるという話が面白かったのだと思う。アイデアが素晴らしく、ストーリーもよく出来ていた。</p> <p>○構成がよく練られており、随所に読ませる工夫の配された良質なエンターテインメント小説に仕上がっていた。</p> <p>○作者が愛を持って、楽しんで書いているのが伝わってくるからだろう、軽やかで愛嬌のある会話や文体で読みやすい一方、胸に重くのしかかってくる主人公の心境や変化には心を打たれ、本になったものを改めて読みたいと思った。</p>	<p>○タイトルは考えすぎだと思う。分かりやすいものにした方がよい。</p> <p>○とにかく情報量が多く、初見の読者は追いつけずに振り落とされてしまう印象。主題がどこに置かれていたのかがよく分からなかった。</p> <p>○必要最低限の情報はなるべく早く読者に伝えるべきである。後から情報が増えるたびに、主人公の印象が変わってしまい、人物像が揺らいでしまう。主人公だけでなく全体的に同じことが言え、キャラの弱さを感じた。</p> <p>○パルクールというものが、最後まで何となくでしかイメージできなかった。小説なのだから、きちんと文章で細部まで表現しないとダメだと思う。</p>
馬の泪	<p>○馬芝居という題材の選定が素晴らしい。馬芝居という文化に光を当て、読者の興味をそそるよういきいきと書かれていたと思う。</p> <p>○物語の背景が詳しく書き込まれているため、実際の分量以上の物語を読んだような印象。</p> <p>○大衆演劇、伝統芸能の人間関係の濃さや、泥臭さ、美しいだけではないこと（悪く言えばとても世俗的）はよく描写されていた。</p> <p>○座長自身の心の動きが丁寧に描かれており、彼女の良い面も悪い面も理解しやすかった。</p>	<p>○テーマを詰め込みすぎたように思う。文字数が少ないのもっと絞るとよい。</p> <p>○馬芝居自体の描写や魅力を描いてほしいと思った。</p> <p>○情緒的な部分を、すべて地の文で説明してしまっているように思う。</p> <p>○どの部分において、京都がテーマになっている小説なのかが分からなかった。その点では、この文学賞には少々適さないように感じた。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
同じ山ぎは見ていた	<p>○タイトル「同じ山ぎは見ていた」の意味が本文を読んだ読者にしっかり伝わるように書かれていたのが良かった。また、各章に付けられた小見出しにも工夫が感じられた。何が書かれているのだろうと思わずページを繰ってしまうようなパワーがあった。</p> <p>○まだまだこの世界の物語を読みたいという気持ちが湧くほど、登場人物がとても魅力的だった。</p> <p>○くせのない素直な文章。やさしい気持ちになれる。話の流れも自然な感じで好感が持てる。</p> <p>○よくある歴史散歩のようだが、19歳の私の、初々しい真つぐな視線の先にある景色があまりに美しく、涙が出そうになった。</p>	<p>○父が残した謎について、最終章で一気に明かされるという構成だったが、急展開であっさり終わってしまったように感じた。</p> <p>○ベタな設定やベタな展開の持つ安心感や心地良さは認めるが、たまには変化球が欲しいと思った。悪い奴、嫌な奴の存在がその変化球になり得ると思う。</p> <p>○謎がいくつも提示される割に全てがあっさり解決してしまう展開、感動やわくわくで心を震わされることはなく、特別に心に残るエピソードも、読後に思い浮ばなかった。</p> <p>○主人公の抱える悩みや葛藤が感じられず、共感性が薄まり、カタルシスが小さなものになってしまっ、もったいなく思った。</p>
河原町通の儀式	<p>○「儀式」というキーワードはどこか秘密めいており、何かが起こることを予感させる。それが物語にずっと貫かれていた。こういった屋台骨のような事柄が小説には必要だと思う。</p> <p>○一気に読め、爽やかな印象も残す美しい短編小説。どこにでもいそうなコロナ禍の学生を取り上げ、間々ありそうなシチュエーションを繰り返しているからこそ、誰もが共感しやすい日常的かつ温かな煌めきが含まれている。</p> <p>○会話が多いことに良い印象を持った。どこにでもありそうな会話がテンポ良く交わされるため、軽快に読み進めることができる。</p> <p>○主人公も良いが、舞子さんのキャラクターが際立っている。舞子さんの「河原町の儀式」が独創的。</p>	<p>○ラストが小説のクライマックスとして盛り上がり欠ける。劇的なシーンやシチュエーションの一つは欲しかった。</p> <p>○主人公にはある程度のリアリティがあるものの、他の登場人物は、生身の人間としてありありと生きている感じがしない。どのような人生を送ってきたのか、どんな背景があるのかということが、会話や行動を通して十分に浮かび上がってこない。</p> <p>○会話が説明的で現実的でない部分が多かった。読み手に想像させる部分が少なく、作者の中で決まっているストーリーどおりにキャラクターがしゃべっているような感覚が残った。</p> <p>○作者が知っていることと、読者に向けて実際に語られていることとの区別に対して、作者自身が無自覚であるような印象を受けた。</p>
五条高瀬川・少年探偵絵巻	<p>○設定やストーリーを一生懸命練ったのが分かる作品。所々面白い設定があり、読者を飽きさせないようにしているのが分かる。</p> <p>○いわゆる探偵ものだが、人情味に溢れていて、穏やかな気持ちで読むことができた。京都の風情も常にも感じられた。</p> <p>○人物描写が鮮やかで、登場人物たちの会話や行動から、その人柄や人生がいきいきと見えてくる。</p> <p>○文体が特徴的で面白い。絵巻というタイトルがついているように“おはなし”という感じが表れていた。</p>	<p>○タイトルにもう少し工夫があった方が良かった。</p> <p>○本格ミステリーと捉えるには、伏線の張り方や書き込みが不足していた。構成も良いとは言えない。</p> <p>○意外性やオリジナリティが、キャラクター設定においても事件の謎解きにおいても、ほとんど感じられなかった。何となく予想できる展開が多く、読後、物足りなさを感じずにはいられなかった。</p> <p>○地の文の情報量が多く、語り口が特徴的なのも相まって、把握に時間がかかる。人物や場所、状況などが頭の中で思い浮かべにくい。</p>
幸せの育て方	<p>○前半部の京都めぐりとその過程で展開される家族に関する思い出の回想などが効果的に記述されている。</p> <p>○主人公の設定が良い。多くの人に受け入れられそうな、現代的な主人公だと思う。現代らしさを取り入れて小説を構成できるのは、小説家として素晴らしい能力だと感じる。</p> <p>○登場人物の心情が丁寧に書き込まれており、細部まで登場人物の状態を把握しながら読み進めることができる。</p> <p>○淡々とした描写ながらも揺れ動く心と京都の描写が相まって、実写化しやすいと思った。</p>	<p>○観光名所を案内しているようなところがあり、どこに行ったか、こと細かく書かなくても良いと思った。</p> <p>○夫と妻の関係性がよく分からなかった。家族構成が分かりづかったことによる弊害かもしれない。</p> <p>○拙さが感じられる文体だった。作者が書きたいシーンを並べて、流れに違和感がないように当てはめて作ったような小説だと感じた。</p> <p>○誤字脱字自体は仕方がないが、ここまで間違いが多いと、一番大事な作品の内容が頭に入っていない。</p>
小説 花いらんかえ	<p>○白川女という今では幻の存在を題材にしている点が面白く、その仕事や生活を知ることができて良かった。また、御所から西へ向かう町並みの変化、住民層の変化も興味深かった。</p> <p>○テンポが良く、主人公と一緒にリヤカーを引きながら京都の街中を北から南へ下がり、年末の人々の様子を垣間見るように読むことができた。</p> <p>○物語中の第2の主人公は、大学生らしく若くて元気な雰囲気溢れる人柄を見事に表現しており、物語に明るく新鮮な躍動感を与えている。</p> <p>○朝の澄んだ空気、においが感じられた。景色を見ているようだった。</p>	<p>○単調で物語に起伏がなく、ただ同じようなエピソードが繰り返しかつ続くだけで次第に退屈に感じた。魅力的な題材が活かされていない印象があり、もったいなく感じる。</p> <p>○全体的に人物の描き方が気になる。作者が「こう見せたい」という人物設定と、実際に描かれている（読み手が文章から受け取る）人物像との間に隔りがあるように思う。</p> <p>○地の文で表してほしいようなことが括弧の心情描写の中に書かれており、読んでいて気になった。</p> <p>○擬音語を安易に使用しすぎていて、小説として表現が稚拙に感じられる。</p>
酔美善の寺	<p>○30数ページに30年近くを詰め込んでおり、物語の中の取捨選択の上手さを感じた。</p> <p>○伊藤若沖の影武者という設定が面白く、若沖の凄さを他人の目から捉えるのは新鮮だった。</p> <p>○史実や歴史考証を基に書かれており、時代設定を含めたこの作品の世界に違和感なく入ることができる。</p> <p>○とても上質な短編小説として堪能した。このように上質な短編小説を書くことは大変難しい。ましてこの短さで、ここまで深い内容を書いて上手くまとめるには、かなり高い技術が必要だと思う。相当な実力の持ち主と感じた。</p>	<p>○終わり方が弱かったのが残念。タイトルを印象づけるためだったのだろうが、よくある形でまとめたという印象だった。</p> <p>○この文章量では登場人物の過去現在未来をそれぞれ描くには少々詰め込みすぎのように感じた。</p> <p>○登場人物が物語の進行のみに存在しているように感じた。物語を動かしているはずの人物たちが、脇役のようだった。</p> <p>○上手すぎて、さらさらと引っかかりなく読めて、見事にまとめられており、静かで落ち着いた印象のため、強烈なインパクトが残らない。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
月の河 ——秦河勝異聞——	<p>○序章がお見事。物語の始まりはこうだという基本を読んでいるような1ページ。情景、心情、回想など、ぎゅっと凝縮された始まりに期待感が高まった。</p> <p>○学校の歴史の授業で必ずやるのに、一瞬で終わってしまう部分の本来のダイナミックさがドラマチックに描かれていて惹きこまれた。</p> <p>○戦いがどのように始まり、進んだのか、目に浮かぶほどに細かく描かれている。ただ歴史を淡々と説明するのではなく、地形を把握し、歴史の動きを理解しているかのような、歴史への思いを感じ取ることができる作品だった。この小説を読んで京都の街並みを見れば、歴史の舞台だったことに思いを馳せることができそうだ。</p> <p>○主だった登場人物がそれぞれ丁寧に深掘りされて書かれており、家族関係、人間関係の複雑な思い、気持ちも伝わってくる。</p>	<p>○作品のタイトルは何か別のものの方が良いのではないかと思う。</p> <p>○このテーマを扱うには、少々長いように感じた。確かに出来事は必要なかもしれないが、それは作者が書きたいことであり、読者としては不要に感じるイベントも散見された。</p> <p>○文章が淡々としているのと、歴史もののため説明文が多くなり、ノンフィクション的なもの、新書に近いと思わせるところが多々あった。そのため、地の文については感情移入しにくい。あくまでも他人事のように映った。</p> <p>○文体が単調なので読み飽いてくる。表現に工夫がない。会話文でハイライトをつけるのは難しいと思うが、せめて地の文や構成で緩急をつける工夫がほしかった。</p>
小さなロマンス デミタスカップの	<p>○テンポもキャラクターも展開も面白く、次ページへの期待感を持って読めた。キャラクターの個性や題材が今時な点も読みやすさにつながっている。</p> <p>○作品の文体が非常に軽やかで読み進めやすい。</p> <p>○ピアノや音楽のテンポが良く伝わって、文章とも上手く馴染んでいた。登場人物のキャラクターもよく伝わった。</p> <p>○ピアノの曲に関する説明やピアノを弾く様子の描写などがとても良かった。</p>	<p>○タイトルがこじつけのような感じで、なぜこのタイトルにしたのか分からなかった。</p> <p>○登場人物に魅力的な人物が多いのに、あまり上手く活かされていない気がした。もっと活躍の場面があれば良かったと思う。</p> <p>○単調な説明ばかりでつまらないと感じる部分があった。小説というより作文のようで、読みごたえがない。言葉が簡単すぎて、ぐっとくる描写があまりなかった。</p> <p>○人の動きの描写、人物の関係性の掘り下げが不足している。</p>
天下所司代 幻の京大仏	<p>○世界観がしっかりしており、歴史を時系列で丁寧に追っていくため、結末が分かりながらも読ませる力があつた。</p> <p>○歴史ものと言いつつも、忍者らしきものの活躍など、エンタメ寄りの部分が多いため、純粋な歴史小説を求めている読者以外の人も取り込むことができる。</p> <p>○誰もが知っている史実の登場人物と、知らない部分とが組み合わせられており、テーマがとても興味深かった。</p> <p>○全体を通して、詳細な記述・描写が多く、臨場感が豊かである。</p>	<p>○徳川と内通していた場面は、拍子抜けしてしまったので、結末はもう少し書いても良いのではと思う。</p> <p>○全体的にシーンが次々と変わり、それぞれのシーンで登場人物が多すぎて、ハイライトが見えにくい。</p> <p>○擬音が多く、その文言で表現しなくてはならないのかと思った。歴史を題材とした作品の中でそこだけが悪い意味で浮き上がってしまった。</p> <p>○会話文がアニメ調のような、小説としては別ジャンルでも良かったような、多方面にどこか中途半端さを感じてしまう。</p>
庭	<p>○作品を通してテーマは分かりやすく、題材も京都の庭だけではなくアイルランドの庭園も絡ませており、オリジナリティがあつて良いと思う。</p> <p>○各登場人物のキャラクターがはっきりしている上、容姿の描写も詳しく想像しやすい。</p> <p>○作者の庭園造形に関する記述は素晴らしく精緻で、文面とその行間から庭園の「静寂」・「動」・「静」という情景がリアルに伝わってきた。</p> <p>○文章の表現が丁寧で、登場人物の思いがよく伝わる。また、セリフが多すぎずスピード感があり、描写がきれいで、流れるように読めた。</p>	<p>○タイトルがシンプルすぎて、あまり惹かれない。もう少し手に取りたくなるような工夫が欲しい。</p> <p>○終盤の展開にやや御都合主義的なものを感じた。序盤・中盤にもっと伏線が欲しかった。</p> <p>○気持ちや思考の説明が過剰だと感じた。つらつらすべて書き連ねるのではなく、もう少し物語の動きの中で自然に伝えてほしい。</p> <p>○良くも悪くもドキュメンタリー番組を見ているよう。あるいはずっと教科書かガイドブックを読んでいるように感じる。説明描写が詳細に興味深いとも言えるが、小説的な面白さがないとも言える。</p>
橋の向こう側	<p>○具体的な説明はないが、情景描写などからコロナ禍の現在の日常を描こうとしているのが感じ取れた。リアルタイムで起きている出来事を題材にするのは、意欲的で良いと思う。</p> <p>○始まり方が良かった。情景や状況がつかみやすく、引き込まれた。嵐山や嵐電についての描写が詳しく想像しやすい。</p> <p>○主人公の心情描写が丁寧で、感情移入して読む事ができた。</p> <p>○エッセンスシャルワーカーの厳しい現状も丁寧に表現されていた。介護についてもリアリティを持って書かれていて、作品を身近に感じる事ができた。</p>	<p>○ストーリーの展開やテーマはとても良かったが、表したい内容に対してページ数が圧倒的に釣り合っていないように感じた。描かれるべきものがあまりに多く省略されすぎている。</p> <p>○キャラ設定が少し雑で、あまり共感できなかった。そのため主人公と心を通わせていくシーンにも説得力が無かった。</p> <p>○同一人物の名前や固有名詞が、短い文や近接した文章の中に幾度となく繰り返し書かれているため、読みづらかった。</p> <p>○空白行をはさんで場面が変わっているのに、いつどこなのかという説明がなく、状況が分かりづらい部分が多い。</p>
フィット	<p>○アセクシャルという題材から逃げずに、今立ち向かえるもの、描けるものをそのままに表現しているように感じた。</p> <p>○登場人物にリアリティがあつた。全ての人物に個性があり、かつ、人間の人間たるやが生々しく書き出されていて良かった。</p> <p>○文体が読みやすい。冒頭のシーンが、セリフが登場しないのにつるつると読み進められたのは、ウィットに富んだ文体のおかげだろう。最初から最後まで一貫して軽すぎず重すぎない、好感の持てる語り口だった。</p> <p>○登場人物が皆いきいきと感じられたのは会話文の書き方の上手さにあると思う。かぎ括弧を付したところと地の文に紛れさせたところの書き分け方に高いセンスを感じる。</p>	<p>○タイトルの「フィット」に違和感がある。合う、合わせる、両方の意味を持たせたものかと解釈したが、この作品の世界とは少し違うように思った。</p> <p>○LGBTは話題だから入れたのかもしれないが、中途半端に入れるくらいであれば、一切触れない方が良かった。とことんアセクシャルに絞る方が、読み応えがあつたと思う。</p> <p>○京都が舞台でなくても充分成立する物語で、無理に京都を舞台にしている感じがした。</p> <p>○様々な現代作家の作品名が頻りに登場するが、あまり感心しない。そういう外力に頼らず自分の世界観を築いてほしい。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
<p>文章誕生!</p>	<p>○A Iに小説を書かせるという話はとても面白そうで、何が起きるのか、すごく期待して読み進めた。登場人物が試行錯誤しながら開発していく姿は思わず応援したくなる。</p> <p>○プログラミングという現代的なものと、昔から脈々と続いている文学作品などの歴史的なことが融合しており、斬新で面白かった。</p> <p>○登場人物が魅力的だった。メインの3人組の関係性も良い。互いの好きなものを尊重しあい、信頼しあっているさまや仲の良さを感じられ、好感もてる。</p> <p>○文章の読み心地が良かった。淡々とした文章の中に味わいがある。季節の描写や登場人物のやりとりなど、とても良いなと感じた。</p>	<p>○A Iが小説を書くという面白い題材であるがゆえに、もう少しゆっくりと丁寧な展開であれば深みが増したと思う。感情移入しにくくあっという間に終わった感じがする。</p> <p>○まだまだこれからというところでお話を終えてしまうのは惜しい気がした。個人的には、この後の続きがもっと読みたい。</p> <p>○文字数の少なさがそのまま人物描写の少なさに繋がっている。もう少しエピソードを加えて人物を掘り下げることができたらもっと良くなっていたと思う。</p> <p>○地の文での直接的な説明が多すぎる。物語の中で表現してほしい。</p>
<p>都の錦</p>	<p>○歴史的な制度や文物に関する記述が詳細かつ丁寧で、時代設定に自然に入っていくことができる。</p> <p>○物語の全体的な構成が整っており、無駄がない。世界観がとてもしっかりとしている。</p> <p>○登場人物の会話や心情描写が的確であり、物語に入り込むことができる。</p> <p>○浮世草子というテーマが興味深い。作者の歴史の知識が豊富にあり、どんどん先へ先へと読み進ませる説得力がある。</p>	<p>○基本的に話が暗いため、読んでいてわくわくする場面がなく、ややしんどくなってしまった。</p> <p>○登場人物に血が通っていないような、単調さを感じた。予定調和が強くて、結末に行き着くために事件や登場人物を並べているようだった。</p> <p>○時代背景などがどこか上滑りしているように感じた。事実創作を絡ませるのであれば、小説ならではのプラスを工夫してほしい。</p> <p>○分量が多すぎる割に、そこまで派手な展開がなく冗長に感じる。</p>
<p>宮居福瀬非骨婢墨草</p>	<p>○奇妙な装いではありながら、全体としては不思議と読みやすさすら感じる。物語の内容を如何に問わず自然と先を読み進めたい力強さとリズムがある。</p> <p>○描写が細かく、臨場感がある。幅広い知識が垣間見えた。また、情景描写が詩的で美しい。句点をほとんど用いない特徴的な文体が織りなす世界観が魅力的。</p> <p>○死ぬことについて彼女が考えを巡らせているさまや、過去にどういった経験をしたか、麻薬で聞こえてくる幻聴の意味など、細かい伏線が丁寧に作品全体で伝えたいことが表現されており良いと思った。</p> <p>○比喩表現に独特の浮世離れ感、ハードボイルド、熟したものが感じられ映像が浮かんできそうで分かりやすく、無二の文体だと感じた。</p>	<p>○主人公のパーソナリティが見えてこないため、共感ができない。確かに、彼女の人生はよく分かったが、彼女が本当に何を考えているのかが伝わってこなかった。</p> <p>○描写が詩的で、良く言えば美しいが、悪く言えば自己陶酔的とも読めてしまう。読者を置いて突っ走っている印象を受ける。</p> <p>○難解な漢字が頻出し、極論、タイトルを見ただけで読む気を失くしてしまう読者が出てくると想像できる。独自の世界観を紡ぐ文体や語彙の選択だと理解はできるものの、とっつきにくさという点で損をしている。</p> <p>○あまりに特徴的過ぎる文体と難解な物語は賛否が分かれると思う。分かりやすい物語小説を求める立場からは忌避されてしまうのではないか。</p>
<p>無名の都</p>	<p>○独創的な設定がしっかりと貫かれていて、物語の世界に引き込まれた。空中都市の姿について、しっかりとイメージができる文章だった。</p> <p>○描写が上手く、光景が浮かびやすかった。SF系世界観×京都というのを今まで読んだことがなく面白い設定だと思った。</p> <p>○一見するとSF小説だが、創りすぎておらず身の丈にあった感じがリアルな人物像となり、好感の持てる作品だった。</p> <p>○文章がとても読みやすい。地の文が割としっかり並ぶ構成だったが、重くなりすぎることがなく、するすると読み進められる。展開に不自然なところもなかった。</p>	<p>○内容に比してタイトルが少しクール過ぎるように思う。もっと柔らかい感じのタイトルにした方が良い。</p> <p>○とにかく短い作品。少なくともSFというジャンルを選んだのなら最低でも3倍の量は書いて欲しかった。二つの世界の違いをしっかり書き込むだけで、奥行きのある作品になったと思う。</p> <p>○舞台を近未来にした必然性がほとんど感じられなかった。</p> <p>○京都観をはじめ、登場人物たちの葛藤も思想もあきたりで、平凡だと感じた。この作者、作品ならではの心に残るようなものが、一つくらいあってほしかった。</p>
<p>めいぐるむらぶ・ばーとーすと</p>	<p>○軸であるワークショップ、音楽、現代詩について丁寧にサーチがされており、分野に詳しくなくとも想像したり共感したりすることができた。</p> <p>○情景描写が巧みであり、目の前にその場面の光景を思い浮かべて読んでいくことができた。</p> <p>○登場人物がなぜ動くのか、何を考えているのか、どうしてそのような学生に育ったのか、生まれた境遇や好きなものなどを通して丁寧に描かれており共感できた。</p> <p>○文字数が多い割に、簡潔な言語表現と軽やかな物語の展開のおかげですらすらと読むことができる。読者の興味を引き付け、物語の世界に引き込む魅力に満ちた作品で、好感の持てる主人公や登場人物たち、優しい世界の描写が心地良い。</p>	<p>○タイトルについて、中身を読めば全てひらがなの理由が分かるものの、長く、本文の内容を想像できないため少しとっつきにくさを感じた。</p> <p>○少々冗長な箇所がある。歌詞の引用は物語上必要かもしれないが、取捨選択してテンポ良く話を進めてほしい。情景描写も細かすぎて、話の本筋から逸れ、集中力が切れる。</p> <p>○主人公の間人らしさがあまり読み取れなかった。主人公の心の揺らぎや、悪い部分などをもっと掘り下げてほしかった。</p> <p>○「あいまいさ」や「未完成さ」の味わい深さを語るのであれば、文体においてももっと読者に余韻を残す工夫を徹底してほしい。</p>
<p>妖術師</p>	<p>○テンポが心地良かった。描写に全く過不足がなく、周囲の情景や、登場人物の内面と行動のつながりなどが、多くの言葉を費やしていなかったにも関わらずしっかりと伝わってきた。</p> <p>○青春の描き方が甘すぎず、それでいて中高生特有の雰囲気を見事に描き出していた。段々と成熟する性的側面や、恋する際に生まれる複雑な感情も活写されていたと思う。</p> <p>○脇役キャラクターが良い。また、卒業式のシーンは青春を感じさせる疾走感のある描写だった。</p> <p>○登場人物の存在感がとても自然で、会話の場面は本当に友人や恋人と話しているような気持ちになる。</p>	<p>○前半部のいきいきとした描写や、スピード感のある展開は良かったが、後半の展開は、もう少し効果的に描けるのではないかと感じた。</p> <p>○途中までは主人公に感情移入できていたが、先生と心中を考え始めたあたりでよく分からなくなった。後半の主人公の気持ちをもう少し丁寧に説明してほしい。</p> <p>○人物造形にやや物足りなさを感じた。あまり大袈裟にしても白けるだけだが、もう少し強い個性を表出しても良かったのではないか。</p> <p>○「命」や「自殺」をテーマにしているのであれば、登場人物一人一人の内面や来歴をもっと掘り下げてほしかった。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
夜に鳴くセミ	<p>○「夜に鳴くセミ」という表題が、単なるバグを表す比喻であるにとどまらず、様々な連想を許す隠喩になっていると思う。</p> <p>○突飛な設定、ダークな世界観に新鮮さを感じ、興味をそそられた。今までにないような設定をテーマにしている独創性を感じた。</p> <p>○登場人物が魅力的で、かつそれぞれの思惑で動くので物語に見えない部分が生じたが、想像力が掻き立てられ面白かった。登場人物が多いが、どの人物にも役割があり、意味を感じられた。</p> <p>○淡々とした筆致で装飾の少ない文章である割に、グロテスクな光景なども目に浮かばせる描写力がある。文章が流麗で読みやすい。</p>	<p>○本作品にはもっと深いテーマが隠れているように思われ、それを作者自身が言語化できていない印象を持った。</p> <p>○作品そのものには破綻もなく良く書けているとは思いますが、もう一ひねりのイベントがあればと思った。</p> <p>○作品全体から訴えたいテーマや作品の「声」のようなものが聴こえてこず、心に響くものがない。</p> <p>○典型的な物語批判的サブカル／ポストモダン小説で、1980年代前半であれば新しかっただろうが、2021年にこの種の話を読まされても新しさを感じない。</p>
羅門の猫	<p>○ジェットコースター的に次々展開するストーリーが、さわやかな疾走感をもたらしている。</p> <p>○タイムハッカー、タイムドリフター、タイムパトロールなど、耳馴染みのない言葉が数々登場するが、分かりやすく説明されるため戸惑うことなくついていけた。また、それぞれの行動目的とその結果に矛盾がなく、納得感とリアリティがあって良かった。</p> <p>○最初に登場した人物も、次に出てきた人物も、どうやら今いる時代の人物ではないらしい。それが冒頭なのだから、どんな話が始まるのか嫌でもワクワクしてしまう。おまけに、どうやら二人は別々の時代の人らしい。これ以上に素晴らしい書き出しはないと思うほど、魅力に溢れている。</p> <p>○斬新なアイデアと、京都の歴史が巧みに融合していた。</p>	<p>○もう少し長編で、設定や人物像が丁寧に描かれていた方が、興味深い作品になったのではないかと。</p> <p>○あっさり終わってしまった印象。「因果応報」がテーマだったように思うが、主人公が因果を断ち切るオチが弱いように感じた。</p> <p>○非常によくあるタイプのストーリーで、新鮮味が感じられなかった。発想にもっとひねりが欲しい。</p> <p>○いずれのエピソードも感情の変化などあっけない描写で、心に迫るものがなかった。何の意味があったのか、その後どうなったのか、多くの疑問も残った。</p>
ラブ・ミー・ドゥー	<p>○親友の自殺から立ち直れないという重苦しいテーマにビートルズの軽い「ラブ・ミー・ドゥー」という曲のアンマッチさが良いスパイスになっているようだ。</p> <p>○一つ一つのエピソードがとても印象深く、どれも心に訴えてくるものがあり、作者の手腕が窺えた。</p> <p>○地の文もさることながら、登場人物の台詞の言い回しやテンポが非常に心地良い。作中の雰囲気に合わせており、まるで静かに降る雪のようにきれいで、いつまでも読んでいたくなる。</p> <p>○描写が映像的で、音も実際に聞こえてくるようなリアリティがあった。</p>	<p>○結局、過去に何があったのかのはっきりした描写がなく、あいまいに感じられ、主人公の悩みが汲み取れなかった。</p> <p>○キャラクターが薄い。幼馴染もとりあえず登場させた感じがする。</p> <p>○「ラブ・ミー・ドゥー」の歌詞に意味があるというのなら、そのあたりの表現に工夫が欲しかった。曲名や歌詞だけで理解を求めるとは丸投げ感が強い。</p> <p>○京都という場所を舞台にして描く必要性があまり感じられなかった。もう少し京都という舞台が活かされる内容だと、この賞により相応しくなる気がした。</p>